

『看聞日記』の人々(一)

はじめに

本稿は、後崇光院伏見宮貞成(一三七二—一四五六)の日記「看聞日記」を読みとるための、基礎作業の一報告である。ここには、「看聞日記」応永二十三年(一四一六)分に記載された(特定の個人を示す)全人物のうち、公家について、大方は「公卿補任」に扱りながらまとめた。分量の関係で、皇室、伏見宮家、武家、僧侶、女性、地下人その他については、別稿を用意したので、併せてご覧いただければ幸いである。^(注)

日記、殊に真名日記の内容を正確に読みとるために、日記中に記されたそれぞれの人物を知ることが必須である。日記の筆者とそれぞれの人物との関係(年令差も含めて)が明らかになれば、そこに記された事柄の内容が明確になるばかりでなく、それらの事柄を書きとめた筆者の意図も、多くの場合、よりはつきりとしてくる。ここで応永二十三年冒頭一日分の記事を検討してみよう。

正月一日、天氣快晴、日影和暖、毎事幸甚々々、伝聞、節会内弁左大臣(今出川)、統内弁広橋大納言(兼宣)也、仙洞御禁、陪膳左大臣、室町殿、親族拝人々參、今出河大納言(美富)令所望初參云々、宮中祝着之儀如例、経良卿、重有朝臣、長資朝臣等候、

位藤邦生

「伝聞」とするが、當時筆者貞成(45歳)は伏見の里に住んでいたのだから、京都での公の出来事を記すためには、それなりの情報源が必要であったわけで、朝廷の行事を先ず記すのが、公家日記の伝統であつて、ここもそれに従つたまでだとは、必ずしも言い切れない。「満濟准后日記」では、同日の記事を、醍醐寺で行われた仏事の詳細な記録で始め、最後に節会の模様を簡単に書きとめている。万里小路時房の「建内記」を見ても、正月一日の記事は、自家の四方拝から起筆するのが通例で、「看聞日記」同日の条の構成は、だから、それなりに個性的であると言い得る。伏見の田舎に住んでいても、都での出来事に決して無関心でいられなかつた貞成の姿勢が、ここに見てとれる。節会の内弁は左大臣。今出川公行(52歳)である。菊亭(今出川)は、貞成が「(我)襤褓の時より今出川入道左府(公直)(筆者注)に養育せられて、多年菊亭に付き。」(椿葉記)と回想するように、貞成又伏見宮家と特別の結びつきをもつた家(清華家)であった。後年(応永二十八年六月)公行が薨じたときには、「予家門多年同宿、每事感存之處、忽落力了、悲歎中々不及調事也」と、「看聞日記」に記している。統内弁は広橋大納言兼宣。當時武家伝奏に任せられ、公武連絡の枢要にあつた。この年室町女院領等の相続を、貞成の父榮仁親王が後小松上皇に懇望したとき、

將軍足利義持と上皇との間の連絡役は、もっぱらこの広橋兼宣が受けもつた。その間の事情は、「此院宣事、白仙洞室町殿へ被申談云々、仍室町殿広橋ニ有被仰旨、彼卿以三位（田向経良^{筆者注}）有申子細、凡無御等閑時宜云々、伏見御安堵事者、室町殿へ以広橋被申、以御書三位罷出」（九月三日）などと記されている。伏見宮家と広橋兼宣とは、閨閣など特別親密な関係があつたというわけではないが、兼宣はこの年五十一歳の働き盛りで、当時の彼の役職からみても、兼宣との交際は、宮家側の利益にとつてはとりわけ大切であった。貞成が兼宣に対して敬語を用いていない点に、ここでは注意しておきたい。

内裏の節会につづいて、後小松院仙洞御寒の記事がある。陪膳の役は、再び今出川公行、一方、幕府では例年どおり椀飯の儀式が行われた。今出川大納言実富は公行の息で、年齢は不詳であるが、父公行の年齢から推して、三十代前半といったところであろう。今出川家で編まれたと目される『菊葉和歌集』には三十一首が採られてゐるから、貞成が菊亭に居住していた頃は、貞成にとって十五歳ばかり年下の作家仲間、なによりの話し相手であつたろう。

最後が宮中（伏見殿）祝着の記事である。経良卿は田向経良（年齢未詳）で、『椿葉記』には、「綾小路ちかくは重資卿、老後に大納言になりて四代中絶の家を興せり。（中略）前宰相経兼卿（永享四年経良改名^{筆者注}）は大納言の嫡孫にてあり。」とあり、伏見宮家の近習の筆頭格であった。重有朝臣は庭田重有（39歳）。『椿葉記』には「庭田宰相重有卿は、これも大納言（重資卿^{筆者注}）の孫にて侍れとも、庶子にてある也。君（後花園天皇^{筆者注}）の御母儀

（歴政門院幸子^{筆者注}）の兄弟なれば、いまは外戚にてあるなり。」とある。貞成の妻幸子の兄弟で、これも宮家譜代の近臣である。長資朝臣は田向長賀（年齢未詳。重有よりも若干年少か）。前記経良の息。「等」と書くのは、彼らのほかに、地下の輩、女中達を含めて示すのである。少なくとも、京都在住の公家など、外部からの参賀客があつたとは思われない。貞成の長男彦仁の践祚（正長元年）後、さらに貞成の京都移徙（永享七年）になると、伏見殿祇候の人々もふえ、参賀の客も毎年増加した。しかし、応永二十三年の時点では、祝着の儀は後年とかわらぬながら、宮家の正月はひとりとしたものであつた。

以上のように見てくれば、『看聞日記』の筆者貞成が応永二十三年正月一日に関心をむけた人々、また、貞成をとりまいていた人々の様相が、幾分かははつきりとしてこよう。因みに、『満濟准后日記』は、この日の節会の記事に、「南殿出御^{正月}在之云々。」と書いたが、これについて貞成は何も書きとめていない。称光天皇（16歳）の動静や健康状態に、彼の強い関心が向けられるのは、数年あとのことであつた。

(一)

以下に公家の人物を列記するが、年齢未詳の者も多い。日記中での呼び方を示す場合、傍注又割注の称号・名は省略する場合がある。名前の下の洋数字は、登場の月日を示している。『看聞日記』を理解する上で重要な人物には、※印を付して短いコメントを加える場合がある。記載の大方は「公卿補任」応永二十三年の記述に

園基秀（園宰相・基秀卿・園・園前宰相・前宰相園）（48歳）
2.29
3.27

2.29
3.27

年に薦じた。

7.22
8.16
9.30
11.22
※この年榮仁親王から堺の秘曲を伝授された。

千種雅光（千種宰相中将）（未詳）
8.154.20
（なし）

中御門宣輔（中御門宰相）（25歳）
2.15
8.（なし）

万里小路時房（万里小路前中納言并頭弁・頭弁時房朝臣）（23歳）
1.7.7.
（なし）

吉田宰相（未詳）
3.24
（なし）
※園基秀のことか。

○前権大納言
甘露寺兼長（甘露寺前大納言兼長卿）（60歳）
9. 3
（なし）

3.24

（なし）

聞日記) 同年の記事中に名前を見せる人物である。関白一条経嗣(59歳) や、前関白近衛忠嗣(34歳) ら、當時活躍していた公卿で、日本記に名前の見えない者も多いが、そこには、単なる偶然のほかにも、場合によつて種々の理由が存在してゐるであらう。(たとえば一条兼良は正二位権大納言であつたが、まだ十五歳の若年で、一条家と伏見宮家のつながりもなかつた)。大切なのは、当時伏見宮家が置かれていた状況では、関白や前関白らとの社交上のつながりが生まれる必然性がなかつたということである。

三

次に、この年「公卿補任」に載らない公家を、その名前の漢字の音読で五十音順に並べる。同音の文字は字画の順に並べた。名前下次に称号を添えている。

永宣（冷泉）（永宣）（未詳）	6.16	（交際あるも対面なし。）	※永
親息か。	7.		
雅清（飛鳥井）（雅清朝臣）（27歳）	9.11	（なし）	

いることから、資忠王の息かと思われるが、「尊卑分脈」、「公卿補任」に雅量の名前は記載されていない。

季俊(四辻)(季俊)(未詳) 2.29
—(なし) 実茂息。

季長（安倍）（安部季長）（未詳）
92.2.6（なし）※系図未詳

季保(四辻) (季保朝臣) (28歳)
9 2.29
6.16 (なし)

季量（安倍季量）（未詳） 2.29
6 (なし) ※系図未詳

基時（園か）（基時朝臣）（未詳） 3.2
（なし）※園基時ならば、前

出走の日記

教高（山科）（山科中将教高朝臣・教高朝臣 9

2.29
4.20
11. 2
11. 5
11. 9
11.29
(なし)

6.10.6.※朝仲息。『看聞日記』に「故教仲（五辻）（教仲）（30代前半）」

朝仲入道奉公雖異于他、御領一麥之後疎遠、教仲內裏奉公之間更不參、今明入番參、其更略日向二來云々、一上二下五。

不參
今朝ノ帽參 其便路田向ニ來云
教豐 (山科) (山科内藏頭・教豐朝臣) (未詳)
.29
.20 (なし)

※のちに家豊と改名。

教育（山科）（教育朝臣）（未詳）
9 2.24 (なし) ※のちに行有と改名

郷盛（和氣）（郷成朝臣）（38歳）
12.9
(交際あるも対面なし。)
307511

経興（勸修寺）（右小弁経興・経興）（21歳）
1.1
1.3
2.
7.
9.1
10.1
11.
11.2
12.3

※「公卿補任」には応永二十七年参議従四位上で初出。『椿葉記』には、「か多手文内守（満頃）は、北越守の寵臣にてあり。」。其子

には、篠山の内府、細賀公が、尾院の前田にありし。其一

孫當時中納言経成卿（経興を改名＝筆者註）に至まで御心さしを存する人也」とある。外様として代々伏見宮家に奉仕していた。
経時（町）（経時朝臣）（未詳） 1.13 ※勸修寺庶流經秀息。「看聞日記」には「勸修寺」と傍注がある。
経直（勸修寺）（経直）（未詳） 4.20 ※経豊息で、前出経興の兄弟。宝徳元年参議正四位下、同年薨。
兼英（源氏・称号不明）（兼英朝臣）（未詳） 2.29 （なし）
兼豊（楊梅か）（兼豊朝臣）（未詳） 2.29 （なし）※「公卿補任」「尊卑分脈」に見あたらない。
元長（東坊城）（坊城大内記）（未詳） 4.20 （なし）※長遠息。「尊卑分脈」に「早世」とある。
行光（柳原・弁行光・行光）（24歳） 6.16 （なし）※後に改名して忠秀。
公興（八条）（八条中将公興朝臣・公興朝臣）（未詳） 5.11 （交際あるも対面なし。）※九条家礼。
行豊（世尊寺）（行豊・傍注に）世尊寺・世尊寺侍従）（未詳） 2.23 3.4 3.11 4.22 4.23 5.6 6.16 9.13 9.23 11.12 12.11 ※行俊息。嘉吉二年非參議從三位で公卿に列せられた。「椿葉記」には「行資（行豊の息＝筆者註）は、祖父行俊卿故院（崇光院＝筆者註）に仕しその例にまかせて、不斷紙候の物にてあり。」と書かれている。行豊も伏見宮家譜代の近習であった。
光相（中院）（光相朝臣）（未詳） 2.29 （なし）※本名は光成。

孝長（藤原）（孝長）（未詳） 2.29 （なし）※孝継息。「椿葉記」に「当時は園中納言・孝長朝臣ならでは比田ひく人なし。（中略）孝長朝臣は当道の物なるうへ、代々御師範にまいれは、尤めざるべき物なり。」とある。
在弘（賀茂）（在弘）（未詳） 11.27 （交際あるも対面なし。）※応永二十六年薨。
在貞（賀茂）（陰陽師在貞）（未詳） 11.26 ※在弘の孫。
師仲（慈光寺）（右衛門佐師仲）（未詳） 8.5 （なし）※光仲息。この年五月八日薨。
嗣教（山科）（山科中将嗣教朝臣）（未詳） 11.2 （なし）
嗣高（山科）（嗣高朝臣）（未詳） 6.20 （なし）
資雅（伯中将・資雅朝臣）（未詳） 2.29 4.20 9.11 （なし）※資忠王息。
【尊卑分脈】に「早世」とある。
治長（栗田口）（治長）（未詳） 4.20 （なし）
持経（慈光寺）（極鷲源持経・極鷲源持仲）（未詳） 2.20 1.4.5 8.※師仲息。この年正月三日持仲と改名。「椿葉記」に（上北面に朝仲朝臣・光仲朝臣・賢恵など、ことに故院に仕し物なり。御堂領禁裏御管領の刻、御恩につきて、その子とも永基朝臣・師仲・教仲・藏人にまかりて奉公す。師仲・教仲は早世して、その子とも持経・重仲など、仙洞眠近すめり。旧好は忘申さず、しせんの時はまいるなり。）とある。
実郷（橋本）（実郷朝臣）（30歳） 3.21 （なし）

酒正頭（名字不知）（未詳）6.16
（なし）※『康富記』（応永二十四年八月四日）に、「師世（造酒正正五上）」ある中原師世か。

公せしかども、ちか比いざゝか子細ありて不仕なれども、時々は
參す。旧好ある物なり。」とある。

重仲（五辻）（藏人将監）（未詳）
4.20
6. 4
※教仲息。持經の項参照

重有（庭田）（重有朝臣・重有）（39歳）
1. 1
1.11
1.27
1.30
2. 8
2.18
2.20
2.23
2.24
2.26
3. 1

3. 7
3. 9
3.11
3.19
3.28
3.29
4. 1
4. 6
4.23
5. 3
5.21
5.25
5. 9
5.16
5.26
7. 5
7. 7
7.12
7.22
7.23
7.24
8.14
9. 2
9. 9
.13
.18
.20
.23
.24

25 3
26 3
5 3
17 3
前記。次に、日本は、この五種のうち、

11. 11. 12. 12.
※前出 應永三十一年非參謀從三位で公卿に列せられ

俊國（方城）（俊國）（未詳）
20
(は) 無俊迷息。
『尊卑分派』

に「早世」とある。

盛光（日野西）（盛光）（未詳）
6.16
（なし）

宣光（広橋）（宣光）^{（26歳）}
.11.6
（なし）※兼宣息。後に改名して

兼鄉。

宗豊（葉室）（宗豊）（未詳） 11.23
（なし）※長親息。外様であるが

『椿葉記』に「葉室中納言宗豊卿は、父祖故院の報権に補せられ

て、その旧好の礼をは申也。」とある。

泰継
（土御門・安倍）（陰陽師泰継朝臣）（未詳）
12.1
（なし）

男子（今出川）（1歳）
1.22
(なし) ※公富息。一月二十二日誕生

長広（高辻）
坊城刑部大輔・長広朝臣
(未詳)
1.20
3.11
5.13
5.20
7.12
2. 3

※後に長郷と改名。
「椿葉記」に「菅家に長衡卿は故院に別して

仕へし物也。其孫長鄉朝臣、故親王（采仁親王）筆者注）昵近奉

公せしかども、ちか比いさゝか子細ありて不仕なれとも、時々は 參す。旧好ある物なり。」とある。
長資（田向）（長資朝臣・長資）（未詳） 1 2 7
7.24 2.26 4.7 9.28
8. 3.3 3.1 9.29
8.14 3.1 3.9 2.29
8.15 2.9 3.4 4.15
9. 2.3 3.4 4.20
9. 1.9 3.4 4.22
9. 1.9 3.4 4.23
11.15 4.2 4.23
11.18 4.2 4.24
11.20 2.3 5.2 5.24
11.24 2.5 5.25
11.25 2.5 5.25
11.26 2.7 5.27
11.27 2.7 5.27
三位で公卿に列せられた。
定親（中山）（中山中将・定親朝臣）（16歳） 4.（なし）
明盛（和氣）（前典葉頭明盛朝臣）（未詳） 12.9
範量（清原）（範量）（未詳） 4.（なし）
有定（六条）（六条少将・有定朝臣）（32歳） 4.20
賴直（丹波）（医師賴直朝臣）（未詳） 7.18
隆夏（四条）（隆夏少将）（未詳） 4.20
流油小路。
隆盛（四条）（隆盛朝臣）（20歳） 1.13
女だから、隆富の從兄弟にあるたる。次項参照。
1.12 1.23
1.29 2.29
2.40 4.20
※隆直息。母が隆仲
隆富（四条）（四条少将隆富・隆富）（未詳） 1.11
1.30 1.30
1.23 1.23
1.24 1.24
1.27 1.27
1.5 1.24
12.24 12.24
12.25 12.25
※四条一流西大路跡跡（早世）息。【椿葉記】に「又四条か家に も大宮大納言隆仲卿は、故法皇の院中の事申さたして、朝廷の押 趣もせしかども、長講堂一変の刻、朝恩ともみな／＼召放たれて その孫隆富朝臣窮のあまり、近年は此境内に祇候して奉公する

なり。」とある。宮家の近習であった。

隆豊（鷲尾）（隆豊朝臣）（未詳）4.20（なし）

量光（日野）（量光）（未詳）6.9.11（なし）

(三)

次に、公家で、この年すでに出家していた人物をあげておく。記載順序は仮に出家以前の位階により、日記中の呼び名一例をもって表示し、次に俗名或いは法名を記す。ほかは、これまでの記載順序に準ずる。

花山一族僧耕雲（花山院長親）（未詳）11.（なし）

日野一位禪門（日野資教。法名は性光）（日野一位入道・一位入道）（61歳）¹⁶1.20（なし）※応永十二年出家。六月十六日の記事に、「(日野) 大納言入道有光卿」とあるのは、筆者貞成の誤りであろう。

二位入道定恵（不明）（未詳）3.29 ※同日の宮家歌会に出席しており、宮家近親の者と思われるが不明。

高倉宰相入道常永（高倉永行）（未詳）3.（なし）※この日薨。

応永六年出家。

水無瀬三位入道（坊門信行。法名は能蓮）（未詳）12.2 ★文和二年出家

飛鳥井中納言入道（飛鳥井雅縁、法名は宋雅）（飛鳥井宋雅）⁵⁵1.6（交際あるも対面なし。）※応永五年出家。

三位入道通光（慈光寺光仲）（三位入道）（未詳）1.10.22 8.5.19.11.22 ★応

永十八年出家。伏宮外様。前出持経の祖父。
少納言人道常宗（清原良賢）（常宗）（未詳）2.5.4 ★室町殿に参仕しており、これまで伏見宮家と將軍家との取次役をはたしていった。応永四年出家。

按察局父禪門（土御門保光。法名歐寂か）（未詳）9.30（なし）※前年まで伏見殿に祇候していた按察局の父であるが、この年存生であつたかどうか確証を得ない。保光であれば、応永二年出家。
右佐入道（裏松持光）（持光入道）（未詳）5.8 11.11.（なし）※この年十一月九日、足利義嗣の謀叛に加担した罪で殺された。

正永（冷泉範綱か）（正永）（64歳）1.28 1.30 3.23 3.24 3.29 3.5 6.19 7.24 8.9 10.15 11.21

11.23 11.24 11.25 ★「椿葉記」に、「賢惠（冷泉範康）〔筆者注〕は故院南方渡御の御共申て、出家して将監入道とて不便に召使はれし物なり。その子とも故範定卿・正永奉公かはらす侍り。正永は既に八旬に及んでいた存命せり。」とある。

柿本人麿（人磨影和歌有御法集）の記事）10.20
小野道風（小野道風影（本賴寿法橋筆云々）の記事）11.1

藤原行成（行成卿目録櫃ニ彼卿真跡一巻）の記事）5.27
故入道左府（今出川公直）7.17 ※応永三年没。

故隆仲朝臣（四条隆仲）12.16 応永四年没。

故朝仲入道（五辻入道） 6.10 ※没年未詳。

以上、見落しや誤りのあることを深く恐れるが、「看聞日記」人物索引作成の手始めとして、ここに報告する次第である。

（附記） 下記の書物に大きな恩恵を蒙った。記してお礼を申し

あげたい。

「證註 椿葉記」（村田正志著、昭和29年3月宝文館刊）

「看聞日記「王者」と「衆庶」のはざまにて」（横井清著、昭和54年12月そしえて刊）

「新北朝の人と文学」（伊藤敬著、昭和54年11月三井書店刊）

注 「中世文学研究」第六号掲載予定

（本学文学部助教授）